

平成24年9月20日

「第9回文化庁映画週間」の開催

文化庁では、魅力ある総合芸術であり、かつ海外への日本文化発信の有効な媒体である日本映画の振興に、様々な観点から取り組んでいます。その一環として、今回9回目となる「文化庁映画週間」を東京国際映画祭期間中に開催し、優れた文化記録映画や永年にわたり日本映画を支えてこられた方々を顕彰するとともに、シンポジウムやトークイベントなどを実施し、あらゆる立場の人々が映画を通じて集う場を提供します。

1. 会 期

平成24年10月20日（土）～10月27日（土）

2. 場 所

六本木ヒルズ、シネマト六本木（港区）

3. 主催等

主催：文化庁

共催：公益財団法人ユニジャパン

4. 実施事業の概要

次項以降参照

文化庁文化部芸術文化課

課 長 舟 橋 徹 （内2822）

主任調査官 佐 伯 知 紀 （内2829）

メディア芸術振興係 佐 藤 理 恵 （内2083）

【代表】03－5253－4111

【直通】03－6734－2083

文化庁映画週間URL <http://bunka-cho-filmweek.jp/>

実施事業の概要

平成24年度 文化庁映画賞贈呈式及び受賞記念上映会

(主催／文化庁)

【贈呈式】

日程：10月20日（土）19：00～

会場：六本木ヒルズ グランドハイアット東京 2F コリアンダー

優れた文化記録映画作品を顕彰する文化記録映画部門および永年にわたり日本映画を支えてこられた方々を顕彰する映画功労部門の贈呈式を実施します。

【受賞記念上映会】

日程：10月27日（土）11：00～

会場：シネマート六本木 スクリーン1

11：00～ 『^{いや}医す者として～映像と証言で綴る農村医療の戦後史～』

14：10～ 『沈黙の春を生きて』

17：00～ 『隣る人』

シンポジウム－MOVIE CAMPUS－

(主催：文化庁／共催：公益財団法人ユニジャパン)

日程：10月26日（金）13：00～

会場：六本木アカデミーヒルズ49 タワーホール

映画製作や上映活動における新しい取り組みや映画文化の旬を、アカデミックな視点で紹介するシンポジウムです。映画業界がいま求めているものは？取り組むべき課題は？映画業界人、文化人、研究者を招いてディスカッションします。シンポジウムは2つのテーマで構成され、ひとつはインターネットでスポンサーを募る新たな資金調達のシステム、クラウドファンディングを取り上げます。従来の映画製作方法を変え得るのか、成功例と問題点を検証します。もう一部では、ショートアニメーションの広大な文脈をひも解きながら独自の魅力を紹介します。他の映像分野とのかかわり合いなど、知られざるアニメーションの役割について語ります。

映画ナビゲーターズ

(主催：文化庁／共催：公益財団法人ユニジャパン)

日程：１０月２４日（水）、２７日（土）１９：３０～２０：３０（予定）

会場：TIFF movie café

映画ナビゲーターズは東京国際映画祭（TIFF）期間中にオープンする TIFF movie café にて開催する映画カルチャー・トークイベントです。様々な分野で活躍するゲストを招き、“映画で学ぶ、映画で知る”をコンセプトに、独自の視点や語りを通じて、映画作品が持っている奥深さや世代を超えた楽しみ方の秘訣をナビゲートしていただきます。

（参考）第２５回 東京国際映画祭開催概要

期間：平成２４年１０月２０日（土）～１０月２８日（日）９日間

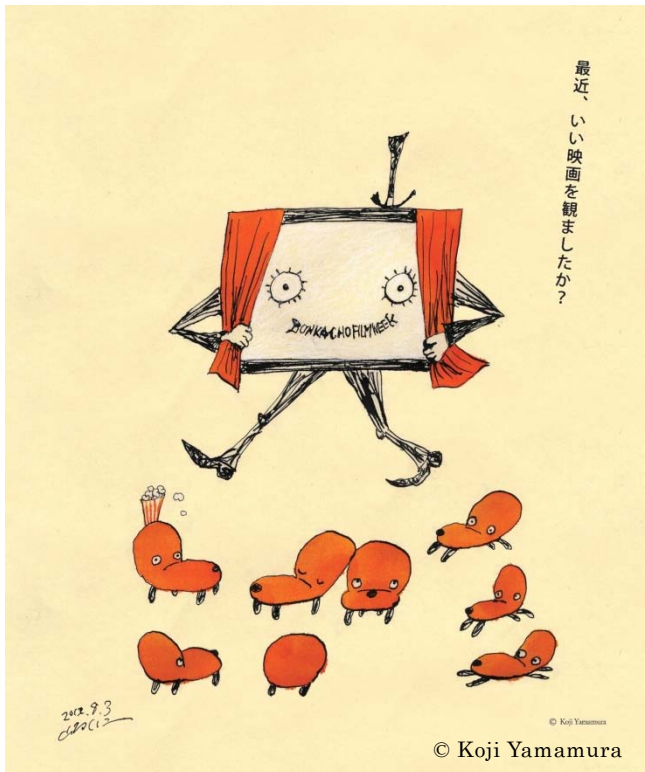
会場：六本木ヒルズ、シネマート六本木等

公式サイト：www.tiff-jp.net

企画内容に関する詳細お問い合わせ先

公益財団法人ユニジャパン E-MAIL bfw2012@uni-japan.org

◆アートワークについて



本年度の文化庁映画週間のアートワークを、国際的に活躍するアニメーション作家・山村浩二氏に手掛けていただきました。

時代を超えて、誰もが映画を思い浮かべられる共通のイメージとして、映画館のスクリーンとイスが、メインキャラクターとその仲間たちとして描かれています。心がわき立つ映画の楽しさと、訪れる人を別世界にいざなう映画館特有の雰囲気、山村浩二氏によるユニークで親しみやすいタッチによって描き出されています。

それぞれのスタイルでスクリーンの前に集うイスたちのように、映画の楽しみ

方は千差万別。どんな時も、どんな人に対しても、映画はいつもそこに在り、観る人を迎えてくれます。記録映画、短編、実写、アニメーションまで、ジャンルを超えた映画を通じてあらゆる立場の人々が集まり、交流しながら生まれる、映画文化の新たなシーンを象徴しています。

山村浩二氏プロフィール

1964年生まれ。東京造形大学卒業。2002年『頭山』がアヌシー、ザグレブをはじめ世界の主要なアニメーション映画祭で6つのグランプリを受賞、第75回アカデミー賞にノミネートされる。また『カフカ 田舎医者』がオタワ、シュトゥットガルトなど7つのグランプリを受賞。これまで国内外の受賞は80を超える。2011年カナダ国立映画制作庁との共同制作で『マイブリッジの糸』が完成。アジアアニメーション映画祭にて優秀アーティスト賞受賞(2006)、アルビーン・ブルノフスキー名誉メダル(2008)、第30回川喜多賞(2012)受賞。日本アニメーション協会副会長、ASIFA 日本支部理事、ヤマムラアニメーション有限会社代表取締役、東京造形大学客員教授、東京藝術大学大学院映像研究科教授。

公式WEBサイト <http://www.yamamura-animation.jp/>

第9回文化庁映画週間

最近、いい映画を観ましたか？

■会期 10月20日(土)～27日(土)
 ■会場 六本木ヒルズ+シネマート六本木
 ■公式サイト <http://bunka-cho-filmweek.jp>

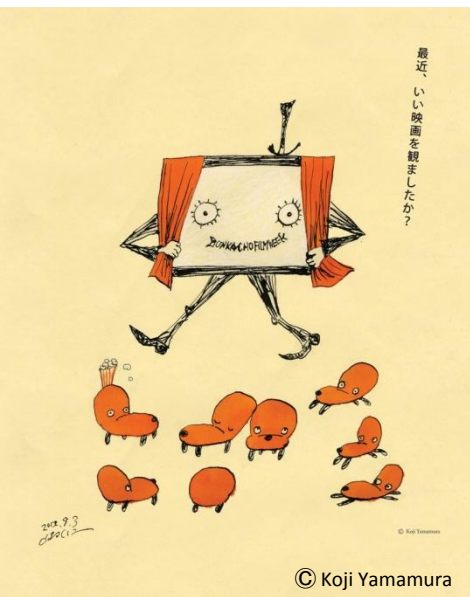


本年度の文化庁映画週間のアートワークを、国際的に活躍するアニメーション作家・山村浩二氏に手掛けていただきました。

時代を超えて、誰もが映画を思い浮かべる共通のイメージとして、映画館のスクリーンとイスが、メインキャラクターとその仲間たちとして描かれています。心がわき立つ映画の楽しさと、訪れる人を別世界にいざなう映画館特有の雰囲気、山村浩二氏によるユニークで親しみやすいタッチによって描き出されています。ジャンルを超えた映画を通じてあらゆる立場の人々が集まり、交流しながら生まれる、映画文化の新たなシーンを象徴しています。

●山村浩二氏プロフィール:

1964年生まれ。東京造形大学卒業。2002年『頭山』がアヌシー、ザグレブをはじめ世界の主要なアニメーション映画祭で6つのグランプリを受賞、第75回アカデミー賞にノミネートされる。また『カフカ 田舎医者』がオタワ、シュトゥットガルトなど7つのグランプリを受賞。これまで国内外の受賞は80を超える。2011年カナダ国立映画制作庁との共同制作で『マイブリッジの糸』が完成。アジアアニメーション映画祭にて優秀アーティスト賞受賞(2006)、アルビーン・ブルノフスキー名誉メダル(2008)、第30回川喜多賞(2012)受賞。日本アニメーション協会副会長、ASIFA 日本支部理事、ヤマムラアニメーション有限会社代表取締役、東京造形大学客員教授、東京藝術大学大学院映像研究科教授。



© Koji Yamamura

CoFesta 2012

文化庁映画週間



25th TIFF 東京国際映画祭
 October 20-28, 2012
 TOKYO INTERNATIONAL FILM FESTIVAL

魅力ある総合芸術であり、海外へ日本文化発信の有効な媒体である日本映画の振興に、文化庁は様々な観点から取り組んでいます。その一環として、映画をあらゆる角度から取り上げる文化庁映画週間を、第25回東京国際映画祭の期間中に開催します。

今回で9回目となる文化庁映画週間は以下、4つのプログラムで構成されます。

優れた文化記録映画と長年にわたり日本映画を支えてこられた方々を表彰する **文化庁映画賞贈呈式**

受賞作品による **受賞記念上映会** 映画界の今を考える **シンポジウム-MOVIE CAMPUS-**

文化人をナビゲーターに迎えて映画の楽しさ・楽しみ方を紹介する **映画ナビゲーターズ**

是非ご取材いただけますよう、ご検討ください。

平成24年度 文化庁映画賞受賞贈呈式 10月20日(土) 19:00～

六本木ヒルズ グランドハイアット東京コリアンダー2F

※招待者のみの参加となります。

日本映画の向上と発展に資するため、優れた文化記録映画と、永年にわたり日本映画を支えてこられた方々に対し文化庁映画賞を贈り、顕彰しています。文化記録映画部門と映画功労部門の贈呈式や受賞記念上映会を通じて、受賞作品と受賞者を広く知らしめるとともに、文化庁の映画顕彰事業への理解を促します。

■映画功労部門

赤松 陽構造 (分野: 映画タイトルデザイン)

井関 惺 (分野: 映画製作)

芝山 努 (分野: アニメーション監督)

明田川 進 (分野: 音響監督)

佐々木 英世 (分野: 音響効果)

林 隆 (分野: 映画美術監督)

このリリースに関するお問い合わせ先: 公益財団法人ユニジャパン (井出、徳武)

TEL: 03-3553-4781

bfw2012@uni-japan.org

※更に詳しいチラシもまもなく完成します。情報掲載をご検討いただけますよう、宜しくお願いいたします。

**平成24年度 文化庁映画賞受賞記念上映会 10月27日（土）11:00～ シネマート六本木**

本年度の文化記録映画部門受賞作品について、下記のとおり受賞記念上映会を実施します。

受賞作品を上映するとともに、受賞者をゲストに迎え、作品が作り出された背景や制作秘話などを紹介しながら、映画のもっている可能性について語り合います。

※入場無料：事前申込制（各作品につき100名様まで）
※公式サイトで近日、申し込み受付開始

■文化記録映画大賞**17:00～『隣る人』**

製作者：アジアプレス・インターナショナル／監督：刀川和也

誰もひとりでは生きられない

親と暮らせない子どもたちと、隣り合う保育士たち。そして、子どもと再び暮らすことを願う親。8年間にわたる撮影の中で、ある児童養護施設の日常から「人と人の関わり」を丹念に紡ぎだしたドキュメンタリー。

■文化記録映画優秀賞**11:00～『医(いや)者として～映像と証言で綴る農村医療の戦後史～』**

製作者：株式会社グループ現代／監督：鈴木正義

農民とともに 一若月俊一と佐久病院の60年一

長野県佐久市（旧南佐久郡）佐久総合病院。医師・若月俊一が貫いた医療と福祉を越えた活動と志は、今も多くの人々をひきつけている。はたして若月が築いてきた農村・地域医療の精神は引き継がれていくのだろうか？

14:10～『沈黙の春を生きて』

製作者：坂田雅子、株式会社シグロ／監督：坂田雅子

ベトナム、アメリカ ― いまだ癒えぬ枯葉剤の被害の傷痕

ベトナム戦争で散布された枯葉剤の被害は50年を経過し、アメリカにも広がっていた。片足と指が欠損して生まれた帰還兵の娘ヘザーは、ベトナムを訪ね、両国の被害者が連帯し、困難に向き合うことの大切さに気づく。

シンポジウム -MOVIE CAMPUS- 10月26日（金）13:00～ 六本木アカデミーヒルズ49 タワーホール

映画製作や上映活動における新しい取り組み事例や、映画文化の旬をアカデミックな視点で紹介するシンポジウムです。映画業界がいま求めているものは何か？ 取り組むべき課題は？ 映画業界人、文化人、研究者を招いてディスカッションします。映画の力を見つめ直し、人と映画を結ぶ新たな可能性を探ります。

※入場無料：事前申込制
※公式サイトで近日、申し込み受付開始

■第一部 『クラウドファンディングは本当に映画を救うのか？』

莫大な製作費をかけられるハリウッド映画と異なり、世界中のインディペンデントの製作者たちは、今も昔も資金確保に苦労している。インターネットでスポンサーを募るクラウドファンディングは、従来の資金調達の方法を変え、現状の突破口となり得るのか？ 成功例と問題点を検証する。

●ゲスト：佐々木 芽生（映画監督）／小川 真司（株式会社ブリッジヘッド代表取締役／プロデューサー）

大高 健志（motion gallery主催）／梅津 文（GEM Partners株式会社代表取締役）ほか

●モデレーター：関口 裕子（株式会社アヴァンティ・プラス代表取締役）

■第二部 『ショートアニメーションの密かな愉しみ』

世界中の映画祭で評価されている日本のショートアニメーション。未知の映像を探求する芸術のひとつとして、その魅力と歴史、未来について考えたい。山村浩二監督をメインパネラーに迎え、広大な文脈をひも解きながら海外と日本の現状を比較し、他の映像分野とのかかわり合いなど、知られざるアニメーションの役割について語り合う。

●ゲスト：山村浩二（アニメーション作家）ほか

●モデレーター：田中文人（東京国際映画祭スタッフ）

映画ナビゲーターズ 10月24日（水）、10月27（土）19:30～ 六本木ヒルズ TIFF movie cafe

東京国際映画祭(TIFF)期間中にオープンする TIFF movie café で開催する映画カルチャートークイベントです。

様々な分野で活躍するゲストを招き、“映画で学ぶ、映画で知る”をコンセプトに、独自の視点や語りを通じて、映画が持っている奥深さや世代を超えた楽しみ方の秘訣をナビゲートしていただきます。

■10月24日（水）19:30～20:30（予定）（19:00開場）

●ゲスト：しずる 村上純（株式会社よしもとクリエイティブ・エージェンシー所属）ほか

テーマ：『ラフ＆スポーツ映画筋トレ（仮）』

お笑い界、スポーツ界で活躍するゲストに、その道で闘い続ける不屈の精神を、お勧め映画を通じて語っていただきます。

■10月27日（土）19:30～20:30（予定）（19:00開場）

●ゲスト：Twitter Japan株式会社（ほか）

テーマ：『Twitterと映画で遊ぼう（仮）』

※入場無料：事前申込制
※公式サイトで近日、申し込み受付開始

※更に詳しいチラシもまもなく完成します。情報掲載をご検討いただけますよう、宜しくお願いいたします。

平成24年9月13日

平成24年度文化庁映画賞（文化記録映画部門・映画功労部門） の決定について

文化庁では、このたび、文化庁映画賞（文化記録映画部門・映画功労部門）の受賞作品および受賞者を決定しましたのでお知らせします。

1. 表彰の概要

我が国の映画の向上とその発展に資するため、文化庁映画賞として、優れた文化記録映画作品（文化記録映画部門）および永年にわたり日本映画を支えてこられた方々（映画功労部門）に対する顕彰を実施しています。

文化記録映画部門では、選考委員会における審査結果に基づき、次の3作品（文化記録映画大賞1作品、文化記録映画優秀賞2作品）を受賞作品として決定しました。各作品の製作団体に対して、文化庁映画賞として賞状及び賞金（文化記録映画大賞200万円、文化記録映画優秀賞100万円）が贈られます。

また、映画功労部門についても次の6名の方を受賞者として決定し、それぞれ文化庁長官から文化庁映画賞が贈られます。

2. 受賞作品および受賞者

【文化記録映画部門】

文化記録映画大賞	作品名	隣る人
	製作者名	アジアプレス・インターナショナル
文化記録映画 優秀賞	作品名	医（いや）す者として～映像と証言で綴る農村医療の戦後史～
	製作者名	株式会社 グループ現代
	作品名	沈黙の春を生きて
	製作者名	坂田雅子、株式会社シグロ

（作品名50音順）

【映画功労部門】

氏 名	年 齢	分 野
赤松 陽構造（あかまつ ひこぞう）	64	映画タイトルデザイン
明田川 進（あけたがわ すすむ）	70	音響監督
井関 惺（いせき さとる）	68	映画製作
佐々木 英世（ささき ひでよ）	72	音響効果
芝山 努（しばやま つとむ）	71	アニメーション監督
林 隆（はやし たかし）	69	映画美術監督

（敬称略・氏名５０音順）

３．贈呈式及び受賞記念上映会

（１）贈呈式

日程：１０月２０日（土）１９：００～

会場：六本木ヒルズ グランドハイアット東京 ２Ｆ コリアンダー

（２）受賞記念上映会

日程：１０月２７日（土）１１：００～

会場：シネマート六本木 スクリーン１

１１：００～ 「^{いや}医す者として～映像と証言で綴る農村医療の戦後史～」

１４：１０～ 「沈黙の春を生きて」

１７：００～ 「隣る人」

文化庁文化部芸術文化課

課 長 舟 橋 徹 （内2822）

主任調査官 佐 伯 知 紀 （内2829）

メディア芸術振興係 佐 藤 理 恵 （内2083）

【代表】０３－５２５３－４１１１

【直通】０３－６７３４－２０８３

文化庁映画週間URL <http://bunka-cho-filmweek.jp/>

平成 24 年度文化庁映画賞贈賞理由及び功績

【文化記録映画部門】

文化記録映画大賞

「隣る人」

とある児童養護施設の記録である。カメラは子供たちと彼らを見守る職員に肉薄し、生き生きとした表情を写し取る。説明はほとんどないが、画面には無邪気だが不幸を抱える子どもたちの喜怒哀楽、献身的な職員の繊細な心情があふれ、困難な社会を透視する。なまじな劇映画よりもよほど豊かな情感とドラマも感じさせた。被写体との関係を丁寧に築いて息長く取材し、問題意識と共感を持ち続けた作り手の技術と姿勢を、高く評価したい。

(勝田 友巳)

文化記録映画優秀賞

「医（いや）す者として～映像と証言で綴る農村医療の戦後史～」

地域住民と一体となり、先駆的な医療活動で知られる長野県の佐久総合病院には、映画部が存在し、そこでは 1950 年代から 30 数年にわたり、16 ミリフィルムで、出張医療、手術、患者会、啓蒙演劇など、あらゆる取り組みが丹念に記録されていた。本作は、約 30 万フィートにも及ぶ、その貴重なフィルムと関係者の証言によって構成された秀作であり、戦後日本の、そして未来に向けて刻まれた美しい記憶であり、勇気ある記録である。

(野村 正昭)

文化記録映画優秀賞

「沈黙の春を生きて」

進歩の美名のもとに現代科学が創出し、制御不能のまま戦争に利用された放射能と化学薬品。これは人類に対する 20 世紀最大の犯罪といえよう。なかでも枯葉剤＝ダイオキシンによる被害は、数世代にも及ぶという。ベトナム帰還兵の子孫と、多数のベトナム人家族にふりかかった後遺症の苦難を正視し、感傷に溺れぬ確かなまなざしで告発したこの作品は、いま、新たな放射能禍に揺さぶられつつある日本に、大きな衝撃を与える。

(藤久 ミネ)

※ () 内は執筆した選考委員名

【映画功労部門】

赤松 陽構造（あかまつ ひこぞう）

中学時代にソウル・バスの「ウエスト・サイド・ストーリー」のタイトルデザインに影響を受ける。昭和44年父が経営する日映美術に入社。映画のメインタイトルやスタッフ名、キャスト名などのクレジットのデザインを一貫して手がけて今日に至る。その総数は400作品を越え、個々の作品内容を的確に把握し、その世界を効果的に表現してみせる独自の文字デザインは、多くの監督から信頼を受けている。本年2月には長年の映画界への貢献を評価され、毎日映画コンクール特別賞を受賞した。主要作品に「ゆきゆきて、神軍」（原一男 昭62）「うなぎ」（今村昌平 平9）「HANA-BI」（北野武 平10）「父と暮せば」（黒木和雄 平16）「それでもボクはやってない」（周防正行 平19）「人間失格」（荒戸源次郎 平21）「テルマエ・ロマエ」（武内英樹 平24）など。

明田川 進（あけたがわすすむ）

昭和38年に虫プロダクションに入り、後に田代敦巳、杉井ギサブローとともにグループ・タックの設立に参加。その後、昭和53年に音響制作会社マジックカプセルを立ち上げ今日に至る。音響監督は科白と音楽を除いた音のパートに責任をもつ仕事で、TVシリーズでは「リボンの騎士」（昭42）「天才バカボン」（昭46）、近年の「名探偵ポワロとマーブル」（平16）、映画作品では「火の鳥2772 愛のコスモゾーン」（手塚治虫 杉山卓 昭55）「幻魔大戦」（りんたろう 昭58）「銀河英雄伝説 わが征くは星の大海」（石黒昇 昭63）「AKIRA」（大友克洋 昭63）などを手がけ、アニメーションにおける「音の存在感」を示した。平成21年からは京都精華大学アニメーション学科の特任教授を務め、後進の育成にも尽力している。他の作品に「火の鳥 鳳凰編」「時空の旅人」（昭61）「PiPi とべないホテル」（平8）など。

井関 惺（いせき さとる）

昭和41年に日本ヘラルド映画に入社。宣伝部、国際部を経て、ヘラルドエースの設立と同時に取締役に就任。イギリスと共同製作の大島渚監督作品「戦場のメリークリスマス」（昭58）やフランスとの合作になった黒澤明監督の「乱」（昭60）に参加。その経験を経て独立し、香港と共同で柳町光男監督の「チャイナシャドー」（平2）、中国とはチェン・カイコー監督「始皇帝暗殺」（平10）、ジェイコブ・チャン監督「墨攻」（平18）の大作を共同製作し話題を呼んだ。また、アメリカとは「レイン・フォール/雨の牙」（マックス・マニックス監督 平21）を製作、一貫して国際共同製作のプロデューサーとして活躍してきた。リスクの高い共同製作に挑戦し、日本映画のグ

ローバル化を目指すプロデューサー、そのパイオニアとして貴重な役割を果たしてきた。現在、タラ・コンテンツ代表取締役。他のプロデュース作品にベルリン国際映画祭で審査員特別賞を受賞した「スモーク」（ウェイン・ワン監督 平 7）など。

佐々木 英世（ささき ひでよ）

昭和 34 年に日活撮影所に効果係として入社、同 49 年まで務めた後、日活の効果技師たちが結成した東洋音響効果グループに参加し、映画・テレビドラマ・アニメーションまでの幅広い作品を担当する。平成元年（有）東洋音響を設立、現在までに劇場映画 120 本、テレビドラマ 400 本以上を担当し、国内の音響効果制作集団の中心的存在として活躍している。音響設計における柔軟な姿勢は多くの監督やミキサーから絶大な信頼を得るとともに、後進の育成にも尽力している。平成の「ゴジラ」（東宝）シリーズなどの大作を担当、近年の担当作品には「アヒルと鴨のコインロッカー」（中村義洋 平 19）「夕凧の街 桜の国」（佐々部清 平 19）「闇の子供たち」（阪本順治 平 20）「劔岳 点の記」（木村大作 平 21）「一枚のハガキ」（新藤兼人 平 23）「この空の花 長岡花火物語」（大林宣彦 平 24）「あなたへ」（降旗康男 平 24）がある。平成 8 年日本アカデミー協会特別賞特殊技術賞受賞。

芝山 努（しばやま つとむ）

昭和 38 年に東映動画（現東映アニメーション）に入社。同 41 年に A プロダクション（現シンエイ動画）へ移籍。テレビアニメーション「オバケの Q 太郎」「巨人の星」の原画などを担当、「天才バカボン」を経て「ど根性ガエル」で作画監督となる。「ガンバの冒険」ではシリーズレイアウト全カットを描き上げ、その精緻な絵コンテは多くのアニメーター・演出家に影響を与えた。同 53 年亜細亜堂を設立。同 54 年「がんばれ！！タプチくん！！」で、劇場用映画を初監督。特筆すべきは、テレビの人気アニメ「ドラえもん」の映画版の監督で、昭和 58 年の「ドラえもん のび太の海底鬼岩城」から平成 16 年の「ドラえもん のび太のワンニャン時空伝」までの 22 作品で監督を務め、その壮大なスケールと卓越したアイデアで、子供のみならず大人の観客も魅了した。他の映画作品に「忍たま乱太郎」（平 8）「劇場版アニメ 忍たま乱太郎 忍術学園全員出動！の段」（平 23）などがある。現在、亜細亜堂相談役を務めている。

林 隆（はやし たかし）

昭和 38 年に日活撮影所美術課に美術助手として入社。西村昭五郎監督の「昼下がりの情事 裏窓」（昭 47）で美術監督となる。この間、山本薩夫監督の大作「戦争と

人間」3部作では（昭45～48）美術助手を務めている。日活のロマンポルノ路線への転換とその後の展開に立ち会い、同55年美術管理室（美術センター）に異動、撮影所発注作品に携わる。独立プロが日活スタジオを用いて製作する歴大な作品の「美術」に関して、その具現化に向けた適切なアドバイスを与え、撮影所の美術技法を伝えるなど、広く映画美術の継承に貢献した。その真摯な姿勢は、平成14年の日活芸術学院の美術担当講師に就任後も変わらず、多くの後進を育成した。また、日本映画・テレビ美術監督協会では長く理事を務め、とりわけ、同18年から始まった「映画美術スタッフ塾」の運営においても中心的な役割を果たし、人材育成と交流に尽力している。映画作品に「桃尻娘 ピンク・ヒップ・ガール」（小原宏裕 昭53）「夢のまにまに」（木村威夫 平20）「ムーランルージュの青春」（田中重幸 平23）など。

<参考>

平成24年度文化庁映画賞選考委員

【文化記録映画部門】

明 智 恵 子	キネマ旬報編集長
勝 田 友 巳	毎日新聞社学芸部記者
谷 川 建 司	早稲田大学政治経済学術院客員教授・映画ジャーナリスト
中 嶋 清 美	公益社団法人映像文化製作者連盟事務局長
野 村 正 昭	映画評論家
藤 久 ミ ネ	放送評論家
山 名 泉	すかがわ国際短編映画祭実行委員

【映画功労部門】

小 澤 秀 高	協同組合日本映画・テレビ美術監督協会理事長
掛 尾 良 夫	キネマ旬報映画総合研究所エグゼクティブ・ディレクター
川 上 皓 市	協同組合日本映画撮影監督協会副理事長
富 山 省 吾	日本アカデミー賞協会事務局長
山 口 康 男	アニメーション批評家

(敬称略・氏名 50 音順)